

第 20 回 第 2 次瀬戸市教育アクションプラン推進会議 議 事 録

日 時：令和 6 年 7 月 17 日（水）午後 3 時 00 分から 4 時 25 分まで

場 所：瀬戸市役所 4 階庁議室

出席者：（敬称略）

<会長> 吉田 淳

<副会長> 右高 恭子

<委員> 一尾 茂正、岡田 照明、加藤 千春、加藤 中哉、中澤 隼、中島 なぎさ、丹羽 光成、野田 敬資、春田 ひと美（50 音順）

<オブザーバー> 井上 紀和（まちづくり協働課長）、川原 知佐栄（文化課長）、田口 浩一（地域振興部参事兼スポーツ課長）、内田 智高（健康課長）

<事務局> 加藤 正彦（教育長）、駒田 一幸（教育部長）、谷口 罌（教育政策課長）、豊田 幸一（教育政策課主幹）、杉江 圭司（学校教育課長）、加藤 淳（学校教育課主幹）、吉村 きみ（図書館長）、松見 健一（教育政策課課長補佐兼企画補佐）水野 臣浩（教育政策課専門員兼指導主事）、松浦 慎造（教育政策課専門員兼企画係長）、梶原 史帆（教育政策課主事）

議事録：

1 会長あいさつ

吉田会長よりあいさつがあった。

2 審議事項

令和 6 年度瀬戸市教育委員会事務の管理及び執行の状況の点検・評価報告書

（対象：令和 5 年度）（案）について

事務局より資料 2 に基づき説明。

委 員：基本施策 6 について、「学校の取り組みだけでは不十分である」と記載をしたが、決して学校が対応を行っていないという意味ではない。

学校が可能な限りやっていることはわかっているが、それでもやはり厳しい現状がある。社会課題として取り扱い、市としてサポートしていくことが大事なのではないかという意味で不十分と表現した。

保護者の生の声を聞くことが多いが、そこではやはり情報が欲しいという声が一番多く、情報を受け取れることによってほっとしたという保護者は瀬戸市内に限らず多い。

瀬戸市は居場所づくり事業を展開しており、情報共有をしていくのも難しいということは理解しているが、もう少し可能になればと考え意見とした。基本施策 15「未来を生き抜く子どもの育成」については、直接現場の子ども達から英語が難しいという声を非常に多く聞く。小学校で 300～400 語程度学習したからできるという体で中学校が始まってしまうというのが全国的に問題になっている。ただし、瀬戸市は独自のカリキュラムがあるとのことなので、子どもがそれによって救済されているといいと思う。実際はどうなっているのかと思うところがあるため、比較や効果といえるものがあると良いだろう。

会 長：基本施策 6 について他の委員からも何か意見はないだろうか。

副会長：保護者の声を聞けるのはありがたく、学校や市外から聞こえる声は本当に貴重だと感じている。

今年度、市内中学校 7 校全てにここほっとルームが設置された。現在は 7 校 107 名以上が登録しており、毎日ではないが予想以上に多くの子どもたちが通っている。ここほっとルームは居場所だが学校の中にあるため、学校との連携を非常に良く取ることができる。今回の意見・提言の中にも記述のあった「様々な想いを抱えながらも学校に通っている児童生徒」はたくさんいると思う。そうした子どもたちが朝の 1 時間だけ利用する、反対に、帰りがけに立ち寄りといった使い方をしている子どももおり、様々な理由で通っている子どもたちの休息の場になっているだろうと感じる。不登校の子どもに限らず誰が使ってもよい場になっているため、長期休業中には数人の外国人児童生徒が日本語の勉強に来る予定になっている。他にも、様々な家庭の事情によって夏休みも来るといった子どもがいる。色々な想いを抱えた子どもたちが気兼ねなく来てほっとできるような場所にしたい。

先ほども言われたように、教育委員会だけ、学校だけでは解決できない課題だと思う。様々な力を借りて、手を携えて進められるとよいと思う。

会 長：オルタナティブスクールのように、学校のカリキュラムと合致せずとも子ども自身がやりたいことに集中して一日を過ごすという場所もある。いわゆる子どもの居場所として将来的にこういった場所が増える可能性もあると考えるが、どうだろうか。

委員：教育機関として増えていくというのは難しいと思う。適切に教員を配置できるかと考えた時に、公立の先生方と比較すると力量不足ではないかと思うので、やはりメインは学校教育になるだろう。子ども食堂等の派生によって子どものつながりができる居場所として増えていくというのは考えられると思うが、場所の確保が難しいという問題がある。

会長：英語学習についてはどうだろうか。

委員：英語の状況については、得意・不得意に感じる生徒の両方が存在すると考える。英会話の塾に通う子どもがいる中で授業は同じ活動をするため、そういう違いが生まれると考えている。

委員：中学校はじめの中間テストの平均点が昔は８０点程度だったと記憶しているが、現在は６０点程度と変動してきている。この６０点というのも、点数が高い生徒と極端に低い生徒で二極化しており、真ん中の子どもは非常に少ない。数値から判断できない点もある。

委員：瀬戸市には小規模特認校として認定されている学校が２校ある。不登校児童生徒に限った話ではないが、うち１校はどの学年からでも通学できるようになったこともあるため、こんな学校もあるというアピールをより力を入れてお願いしたい。

委員：今の子どもたちは将来に対して不安を持っている子が多い。社会がどう変わっていくか不透明な状態だと、母親は非常に不安になり、子どもにも伝染していく。間違いを起こさせてはいけない、失敗させないと母親は考えるようになる。大人が不安を取り除き、子どもたちが安心して生きていけるような環境を整備していく必要があると思う。

委員：昨年度卒業生の外国人児童６人が、お金をたくさん稼いで家族を豊かに幸せにしてあげたいと口をそろえた。子どもながらに保護者が必死に働いて何とか生活できているということを実感していた。恵まれていない点が多いが、日本の子どもをみると反対に恵まれすぎていて足りないことを知らないと感じた。今の子どもが抱えている不安感という点と繋がるのではないだろうか。

委員：学校に足を向けない児童生徒を相手にしている中で、仕事に行きたくない・学校に行きたくない等は誰もが思っているということをもっと発信していかなければと思った。先日養護施設・支援センター等の建築に関わる方と理想の場所・間取りについて考えた際、小学生から学校教員までを経て、ハード面でほっとできる場所はどこであったかを考えた。自分にとっては大学の科室であり、何でもできる場所があったから大学がとても楽しかったと思いだした。本当はどの学校にも休息できる場所があるということが最も必要なことだと思う。ここほっとルームに通っている子どもたちがいるということがそういった一息つける場所を求めているということであり、多少の教員加配や設備への投資を考慮し、学校がオルタナティブスクールの役目を果たせるような場所にしてほしい。

また、萩山小の子どもが特別支援学校の子と交流する時間が失われないよう学校統合を進めてほしい。一緒にいるということが共生に繋がると思う。

委員：子どもたちの体力については、低下を年々感じている。できる子とできない子、やらない子の差が大きく広がってきている。

体力を身に付けさせるよう工夫しているが、限られた時間の中で運動量を確保しながら多様な学びをしようとするとなかなか成果が上がらない状況が続いている。特に水泳は差が顕著に表れる種目であり、家庭の力が表面化すると感じる。今後の課題として研究は続けるが、楽しみながら、そして運動を好きになりながら体育に取り組めるように市として取り組んでいく必要がある。

委員：学校現場が直面している課題の一つは中学校部活の地域移行があると思っている。30年前から社会教育移行という声は上がり続けていて、地域スポーツクラブ等で具現化しながら進んできた。

一方で少子化、教員の働き方改革、安全安心の確保等が急激に表面化し、複雑多様化してきた。指示はあっても現場はついていくことができず、地域の実情によって動き方も異なり、一丸になって物事を進めていくのが難しい状況になっている。市でも具体的に考えていることと理解しているが、今後の教育を考えるうえで重要な要素だと考えている。

意見・提言で「教職員の力量向上に期待したい」等の教員がもっと努力する必要があると述べられる一方で、「教職員の授業研究等の時間を十分に確保する取り組みを期待したい」等のまるで対のような意見が散見される。

学校教職員も努力を継続していくが、教職員のみならず市として、社会と

して更なる支援によって学校もより頑張っていけると思う。

委員：管理職になって考えたこととして、自分の学校がどんな強みをもっているかを理解して発信していくことが必要だと思った。

一地区で例えると、瀬戸特別支援学校との交流をすることで子どもたちが優しい表情になる等、中学校ブロックで行っている取り組みの効果が子どもたちに表れていると感じた。また、アクションプラン等の施策によって現場の取り組みが可能になっていることを改めて感じた。子どもたちには人とかかわる力を学校という集団生活の中で養ってほしいと考えており、集団に合う・合わないはあるが、学校だからこそできることで心が育つような手立てをもっと考えていき、それを現場の先生が達成できるように管理職としてどう動くかが必要だと感じた。

委員：学校に対する期待が非常に多く、家庭の役割、学校の役割を今一度考える必要があると自分も感じる。学校に対する期待が大きいということは学校として光栄に思ふべきことかもしれないが、学校で教えるべきとされることが多すぎる。時間が有限であるのに対し、時代の変化とともにやるべきことは増え続けている。代わりに減っているかと考えるとそうではない。教員の長時間労働などに弊害が出ているのではないだろうか。優先順位をつけ、学校の役割であったとしてもどこに時間を多く費やすべきかを考えるべきである。例えば「しつけ」はあくまで中心が家庭であるように、学校や地域の役割といったものをもう少し整理し、学校の教員が過重な負担を負わなくても済むようにする必要があるだろう。教員のなり手が減り、状況が深刻化していることもあるため、真に学校で担わないといけない役割の優先順位をつけやっていくことが大切だろう。

会長：様々ご意見をいただきましたが、この度提出された評価・報告について原案通り承認してよろしいでしょうか。よろしければ拍手をお願いします。

<拍手全員>

会長：可決承認いただきましたので、この報告書については8月定例教育委員会に上程し、議決後、瀬戸市議会に報告し、公表することとなっています。

3 会長総括意見

吉田会長より今回の報告書に対する総括意見が述べられた。

4 教育長総評

加藤教育長より今回の報告書に対する意見提言へのお礼及び総評が述べられた。